

外務大臣賞

アジアの村、自分の島、そして世界のために

松山市立中島中学校 2年

岡田 葉那

私の知り合いのところには、アジアの国々から来た若者が農業研修にやって来ます。研修生は、みんな国も違えば年齢も違います。中には、小さな子どもを国に置いてきた若いお母さんもいます。研修中の約1年間は、自分の子どもに会えないのです。私はなぜ自分の子どもを置いてまでここに来なければいけないのかと疑問に思っていました。しかし、彼女達は芯のある声でこう言いました。

「寂しいけれど、自分の村のためだから。」

と。その言葉には、「自分の村を救う」という使命感のような強い気持ちが込められていました。

そんな彼女達を見て、私は自分はどうだろうと考えました。私は、自分のふるさとである中島のために何かしたいと思っています。しかし、そう思っているだけで結局は何もできていないのではないだろうか。海を渡り、自分の子どもを置いてきてまで、自分の村のために何かをしようとする彼女達のような行動力が私には欠けているのではないだろうか。そう気付かされました。

研修生の多くは、ネパール、ミャンマーなどアジアの国から来ています。私は彼らに現地の暮らしを教えてもらいました。彼らの生活は、私の想像以上のものでした。その中で1番驚いたことは、水道が通っていないことです。ネパールの山あいの村では、毎朝片道2時間かけて水くみに行くそうです。その他にも、ガスや電気が通っておらず、太陽光パネルによるわずかな発電で夜間に明かりを灯しているという人もいました。

それに対し、私の家では、蛇口をひねればきれいな水が出るし、スイッチ1つで明かりが灯ります。そんな当たり前のことが世界では決して当たり前ではないのだと、研修生との話を通して気付かされました。

私は将来、NGOを立ち上げたいと思うようになりました。アジアの研修生を私のふるさと中島に呼び、農業や漁業の研修ができるようにしたいです。研修生との話で私が1番思ったのは、研修に来るまでの大変さです。研修生として日本に来られるのは、村でたった1人です。私が出会った研修生のように村のために何かしたいという人はまだたくさんいると思います。だから、中島で研修を行うと共に指導者が現地に出向き、多くの人が学べる機会もつくっていきたいです。小さい子どものいるお母さんや様々な理由で研修に行けない人にも日本の技術を学んでほしいです。

また、中島でNGOを立ち上げることは、中島が抱える人口減少という問題への、1つの解決策にもなると思います。研修センターで雇用を増やすと共に、外国との交流が盛んな島としてPRするのです。

私は、アジアの村、自分の島、そして世界のために貢献できる人になりたいです。